

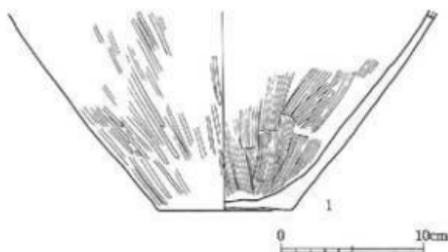
色) から切り込んでおり直径約10mの平面プランを持ち、床面積78㎡前後のものと思われる。

住居跡は上部を後世の削平を受け壁は10cm前後が検出され、埋土は褐灰色(10YR4/1)である。全体的に住居跡はやや北側に傾斜し、周壁溝は住居跡全体の約三分の二で、幅25cm前後、深さ15cm前後が南側に検出された。

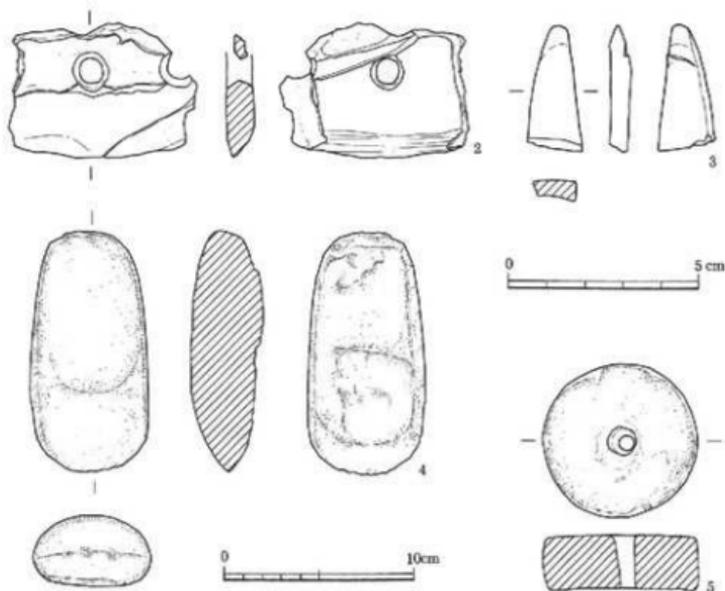
屋根を支える柱は壁面近くに配置された11本(61~71-OP)と中央部の4本(74~77-OP)の計15本で構成されていたと思われる。

住居跡中央には一辺1.5m、深さ0.5mの隅丸方形の炉が存在し炭が充満していた。

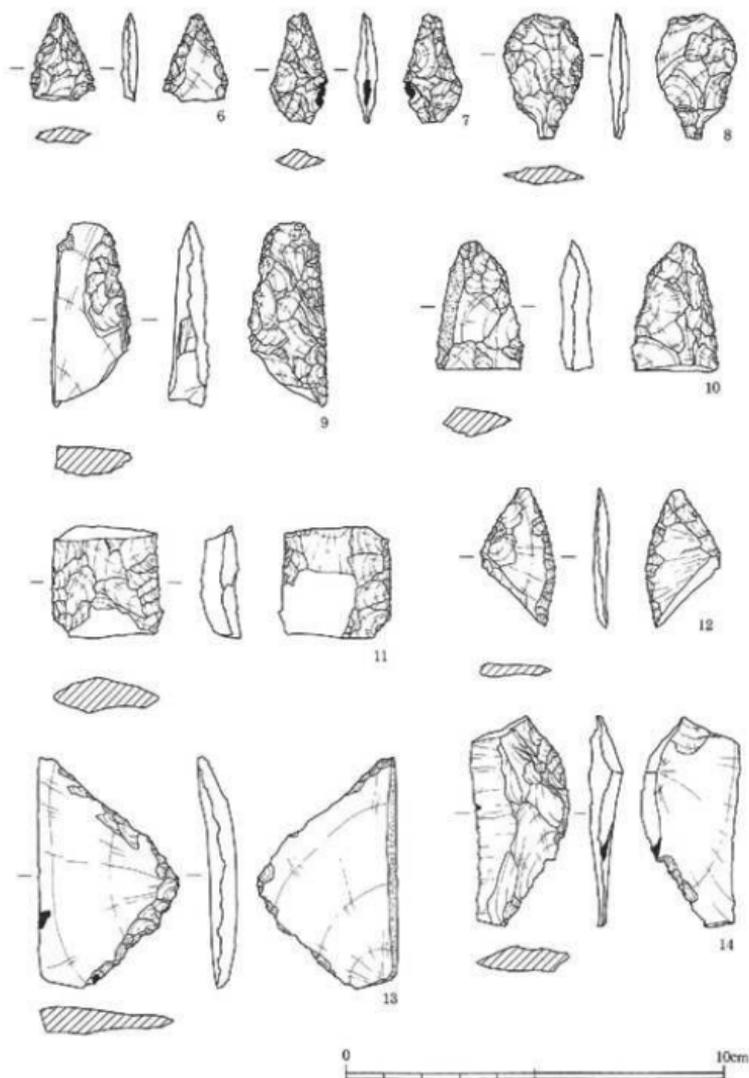
住居跡内からの土器の出土は少なく、図示できたのは炉内より出土した甕の底部のみである。



第12図 57-OD出土遺物(1-A)



第13図 57-OD出土土器(1)(1-A)



第14图 57-OD出土石器(2) (1-A)

また、石製品としては石包丁・石製紡錘車・石鎌・石錐などがある。

57-OD 出土遺物 (第12~14図、図版49・64~66)

1は住居跡の炉内で出土したもので残存器高14、底径9.6cmを測る甕の底部である。外面調整は縦方向のヘラミガキで、内面はハケメが施されている。胎土中には半透明の砂粒を多く含む。2は片刃の石包丁で両端を欠損するが、現存長3.53、幅4.95、厚さ0.78cm、重さ20gを測る。孔径は0.9cmで両側穿孔である。3は高さ3.34、幅1.51、厚さ0.52cm、重さ4.44gを測るもので、先端がよく研がれており砥石ではないかと思われる。

4は大型の蛤刃石斧で最大長12.8、幅6.1、厚さ3.7cm、重さ513.86gをはかる。この石斧は完形品で基端部は丸みを持ち、刃部はよく研磨されているが先端部分には打撃痕が見られる。5は石製の紡錘車で外径4.1、穿孔0.6、厚さ1.5cm、重さ36.31gである。紡錘車の平面形は正円に近く、穿孔は比較的中心部にあり側面はやや丸みを持つ。

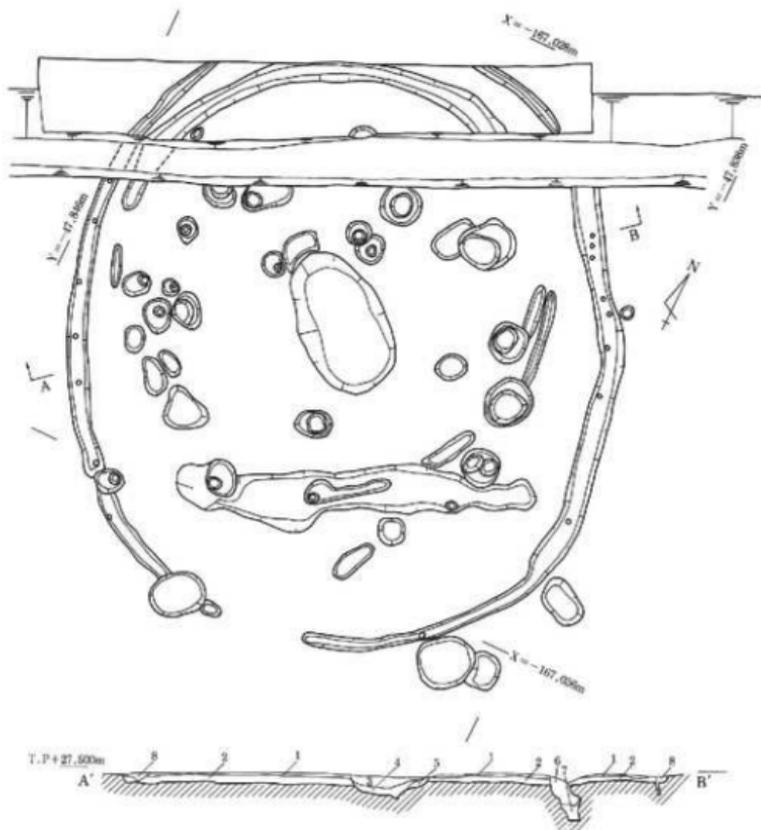
6~14はサヌカイト製の石器で11は71-OP内で出土したが、そのほかは住居内の埋土内より出土した。6・7は石鎌で長さ2.3・2.88、幅1.65・1.49、厚さ0.4・0.56cm、重さ1.50・1.82gを測る。7は有茎式の石鎌である。8は長さ3.28、幅2.10、厚さ0.55cm、重さ3.30gの石錐で先端部を欠損する。9・10はスクレイパーで長さ4.82・3.38、幅2.00・2.26、厚さ0.99・0.86cm、重さ10.39・6.89gで、一部に原礫面を残す。11は尖頭器の中央部で先端と下部を欠損する。現存長2.93、幅2.88、厚さ0.94cm、重さ9.56gである。

12~14は横長剝片で長さ3.56・6.02・5.56、幅1.94・3.67・2.67、厚さ0.38・0.75・0.86cm、重さ2.33・16.49・9.64gをそれぞれ測る。12は石匙の未製品かもしれない。

1100-OD (第15図、図版15)

その1のB地区(1-B)で検出された。調査区の北端で検出された住居跡は、北側の溝の一部を調査区外に延ばすがやや楕円形の平面プランを持つと考えられる。

住居跡は地山面から切り込まれており、中央部の4本と外側の6本の柱で構成されていると思われる。住居跡は長径約8mで中央部に楕円形を呈する炉を持ち、長辺2、短辺1.2、深さ0.3mを測り、底部には一部で炭が見られた。住居跡の埋土は灰色(10Y6/1)で、床面積は50㎡前後になるとと思われる。柱跡の掘方は直径40cm前後のものが多く深さは平均50cmとやや深い。柱跡の外側を巡る溝は幅15cm前後、深さ10cm前後で、両側の一部が1.2m塗切れている。図示できる遺物は出土しなかった。



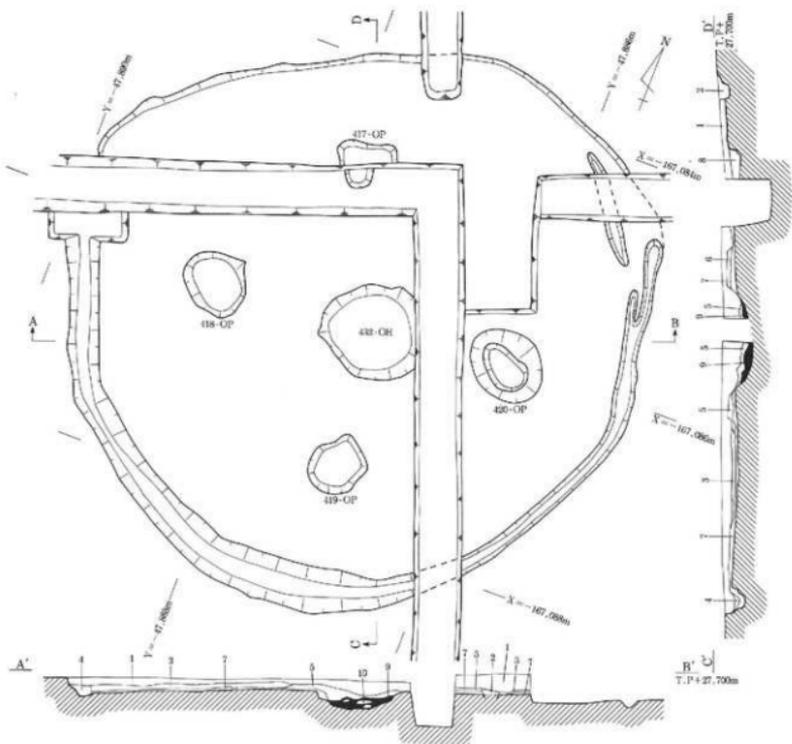
- | | |
|--------------------|-----------------|
| 1. 30Y 6-1 オリーブ灰色 | 5. 10BG 6-1 青灰色 |
| 2. 10Y 6-1 灰色 | 6. 5G 3-1 暗緑灰色 |
| 3. 7.5Y 3-1 オリーブ黒色 | 7. 10G 6-1 緑灰色 |
| 4. N 2 黒色 | 8. 10YR 5-1 褐色 |



第15図 1100-OD平・断面図 (1-B)

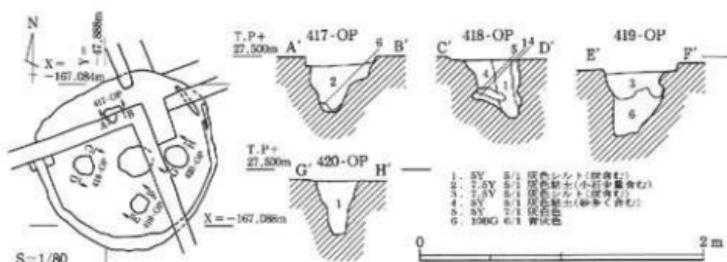
2-O D (第16・17図、図版16)

その2のA地区(2-A)で検出された。住居跡の平面プランは円形で直径約5m、床面積19㎡を測り中央の炉と4本の柱で構成されているものである。



- | | |
|---------------------------|----------------------------|
| 1. 7.EY 6-1 炭シロ | 6. 2.80Y 8-1 灰白シロト |
| 2. 3Y 5-1 灰色 | 7. 2.30Y 7-1 黄オリーブ灰シロト(黒味) |
| 3. N 5-0 灰シロト(灰多く含む) | 8. 7.EY 5-1 灰色 |
| 4. N 6-0 灰シロト(灰白ブロッコ・混含む) | 9. 黄緑灰(白色ブロッコ含む) |
| 5. N 4-0 灰シロト(灰多く含む) | 10. 10Y 8-1 灰白色粘土 |

第16図 2-OD平・断面図(2-A)



第17図 2-ODP it断面図(2-A)

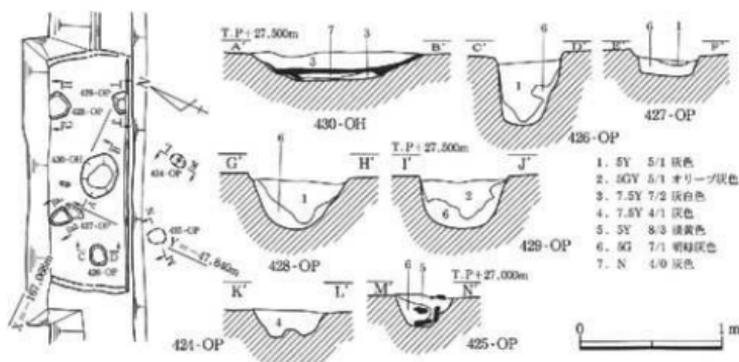
住居跡は地山面を切り込んで作られ、埋土は灰シルト(7.5Y6/1・N5/0)で埋まっているが2層に分けられ、下部には炭が多く含まれる。また、住居内の一部では明オリーブ灰シルト(2.5GY7/1)の粘土をもちいて貼床をしていたと思われる部分も確認された。

柱穴は全部で4ヶ所確認したが、掘方の直径は60cm前後で、深さ50cm前後とやや深かったが柱根は確認できなかった。溝は南側の部分が広く最大幅40cmで最小幅は10cm、深さ15cm前後を測る。埋土は灰シルト(N6/0)で埋まるが、炭を含んでいた。

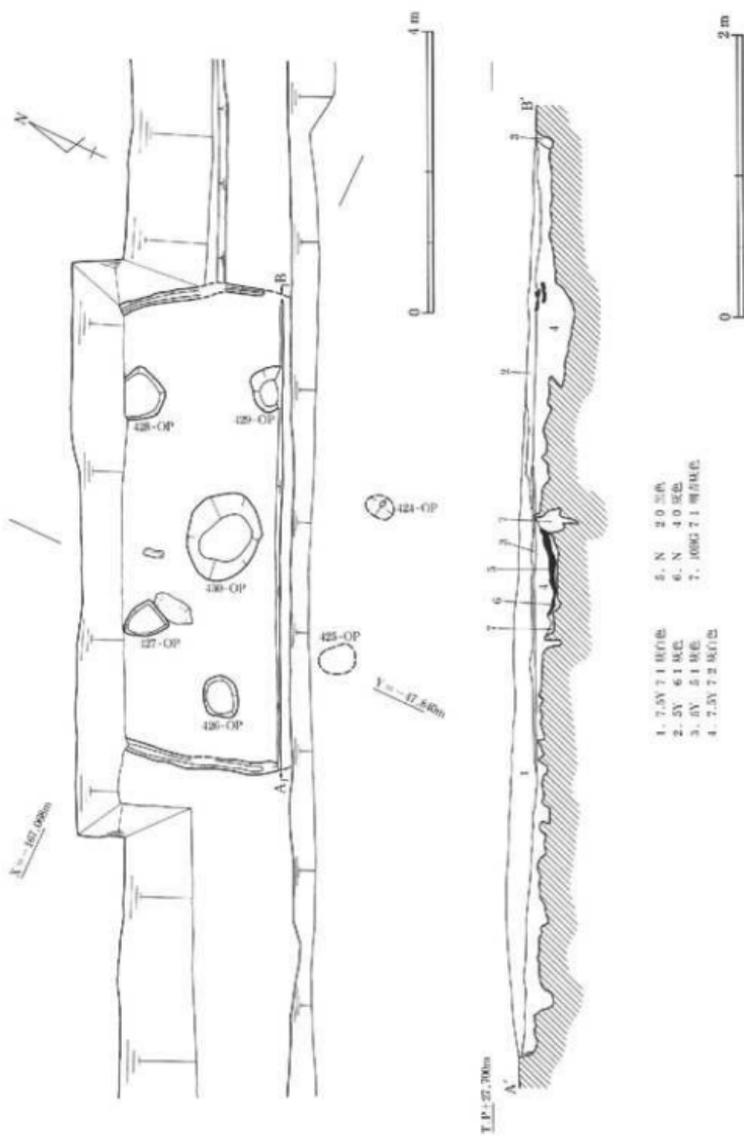
炉は住居跡の中央部で確認され、直径約80cmの円形で深さ25cmを測る。炉の底部には炭が充満しており、灰白色の粘土をブロック状に多く含んでいた。

3-O D (第18・19図、図版16)

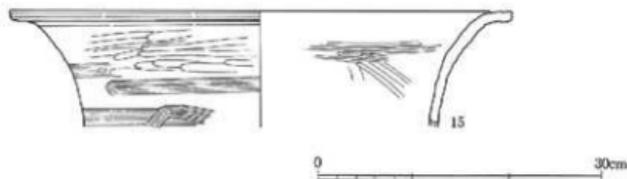
その2のC地区(2-C)で検出された。住居跡は北側を調査区外に延ばし、南側は後



第18図 3-ODP it断面図(2-C)



第19圖 3-OD平・断面圖 (2-C)



第20図 3-O D内428-O P出土遺物(2-C)

世の擾乱と断面観察用の畦の崩壊によって全体の平面プランは不明であるが、円形を呈していたと推測される。住居跡の最大長は3.5m前後で、溝・柱穴・炉を検出した。

住居跡の壁は高さ10~15cmが残り、埋土は灰白色と灰色の粘土が相互に堆積していた。床面は水平ではなく西側に傾斜している。柱穴は全部で6本(内2本は南側で柱穴と思われる痕跡)を検出したが、住居跡の規模から考えて4本柱のものと考えられる。

溝は幅15cm前後で、深さ10cm前後を測る。炉は中央に位置していると思われ、直径60cm、深さ20cm前後でやや楕円形を呈している。内部には炭が多く充満していた。遺物は少ないが図示できたのは428-O P内より出土した広口壺形土器の口縁部だけであった。

3-O D出土遺物 (第20図)

15は広口壺形土器の口縁部で斜めに外反し、口縁端部は面をもつ。口径は復元で52cm、残存器高12.6cmを測る。口縁部外面下半には粗い横方向のヘラミガキ、頸部以下に櫛描直線紋が見られる。内面には横方向のナデの後に粗いヘラミガキが見られる。

1-O D (21~24図、付図4、図版17~21)

その2のC地区(2-C)のはば中央北寄りで見出された大型の竪穴住居跡で、柱穴や溝などの切り合い関係から3棟分が重複して検出された。

住居跡の北端はその1・2の調査区の境目にあたることや、その1の1-B・C地区を分けた畦や側溝によって分断してしまったため、その1の調査区ではピットや溝状のものの一部が検出されただけであった。

重複して検出された住居跡は、床に粘土を貼って整える部分が認められることから、立て替えとは別に床面を部分的に広げたり、整えたりする手直しがたびたび行われていたように思われる。なお、住居内からは少量の土器片が出土したが、図示できる物はなかった。

今回の報告では、重複して検出された3棟分をⅠ～Ⅲ期に分類し、その1・2の調査結果を統合して柱の配置を復元して報告する。

「Ⅰ期の住居跡」 (第21図、図版18)

Ⅰ期の住居跡は重複して検出された中央部に位置する。住居内で検出した遺構は、柱穴が外側に8本、内側に2～3本の柱跡と溝、炉跡などを検出した。この建物跡を復元すると、外側の柱は13本、内側の柱は4～6本の柱で構成される建物と思われる。

外側の柱は2～2.3mの間隔に立てられ、ほぼ中央部に炉跡を持つ建物である。壁溝と思われる溝は幅25cm前後、深さ20cmで巡り、Ⅱ期の柱穴跡に切られるようにして検出された。溝の埋土は灰色系の粘土で、炭が混じるものもある。

柱穴跡は直径60cm前後の掘方で深さ40cm前後を測る。埋土は灰色系の粘土で埋まり柱根が検出されたものもある。

住居跡の中央には直径60cm、深さ30cmの炉跡が検出された。炉は上部をⅡ期に切られ、北側をⅢ期の炉に切られているために本来の形状は不明であるが、隅丸方形のものになると思われる。炉跡内の下部には炭が充満していたが、遺物は出土しなかった。

この建物は直径11mを測り、床面積は約95㎡になるものと思われる。

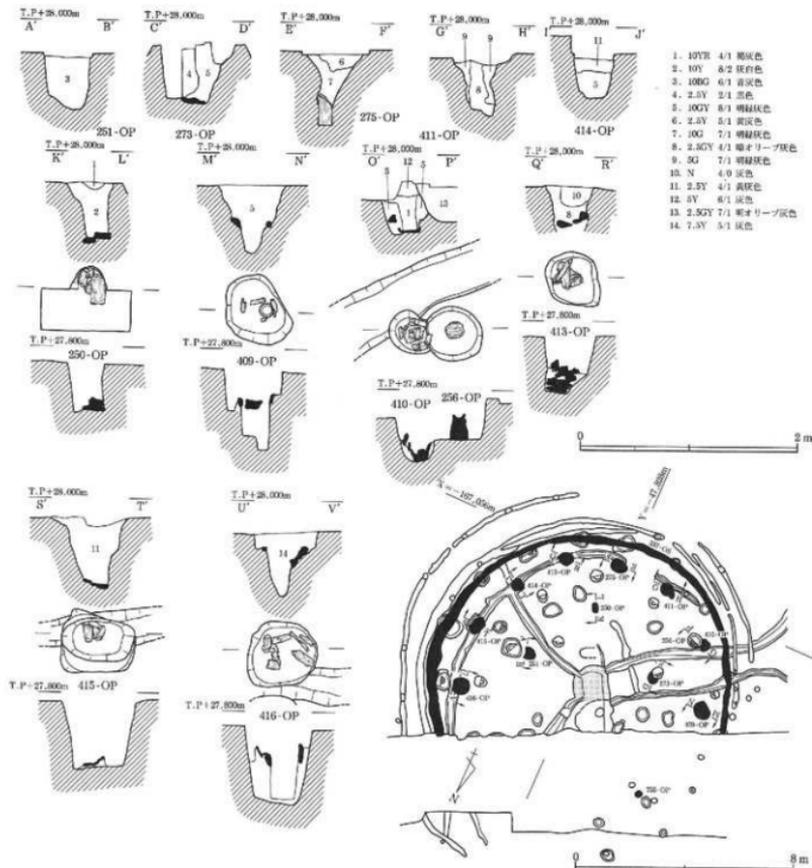
「Ⅱ期の住居跡」 (第22図、図版17・19)

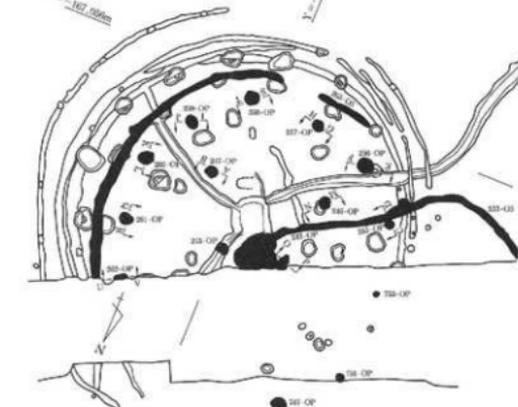
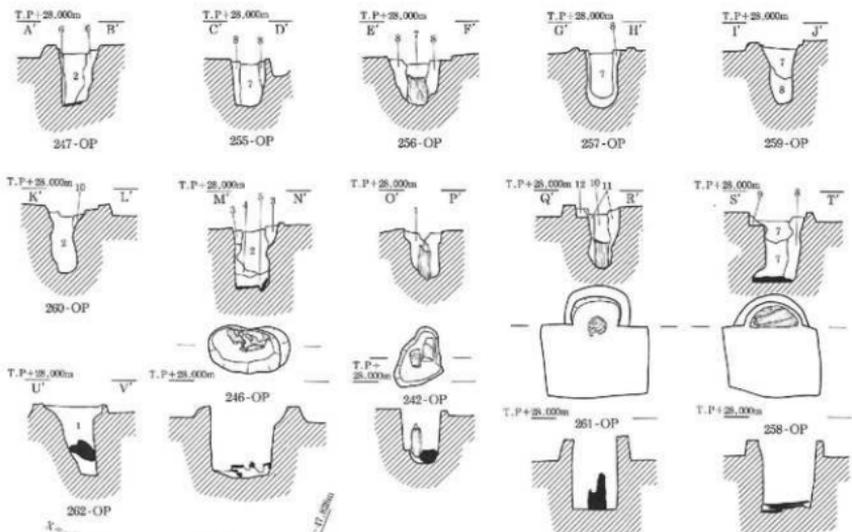
Ⅱ期の住居跡はⅠ期の住居跡を拡張するようにして作られている。外側の柱は調査区内で10本、内側の柱は5本を検出することができた。この建物は復元すると、外側の柱16本、内側の柱は6本で構成され、直径12m、床面積は約113㎡を測るものと思われる。

この建物には、竪穴部の約1m外側にも同心円状の溝が確認され、その径は復元すると約13mを測る。この検出された溝は柱穴等の位置関係から考えると竪穴部の端となる可能性もあり、この場合住居の最大面積は約133㎡になるものと思われる。

柱穴跡は直径70cm前後の掘方で深さ55cm前後を測り、埋土は黄灰色系の粘土で埋まっていた。柱穴跡の底部には、柱の根石の代わりとして使用されたと思われる木片が出土したのもある。柱根の痕跡は確認できなかった。

ほぼ中央部に炉を持つが、この炉はⅠ期の炉を拡張して作られたと思われる。炉の北側はⅢ期の炉に切られているため本来の形状は不明であるが、隅丸方形のものと同推測される。炉の規模はⅠ期と同じであるが、炉からは3方向に排水溝が走り、竪穴住居跡の外側





- 1. 5Y 5/1 灰色
- 2. 10X 3/1 黑褐色
- 3. 7.5Y 7/1 灰白色
- 4. 5HG 7/1 褐色灰色
- 5. 2.5Y 4/1 黄灰色
- 6. 7.5CY 7/1 明绿灰色
- 7. 10YR 4/1 赭灰色
- 8. 2.5Y 3/1 黄灰色
- 9. 5Y 7/1 灰白色
- 10. 5PB 3/1 暗青灰色
- 11. 2.5Y 6/1 黄灰色
- 12. 10Y 7/1 灰白色

第23图 1-OD川期平・断面图(2-C)

に大きく延びているものもある。

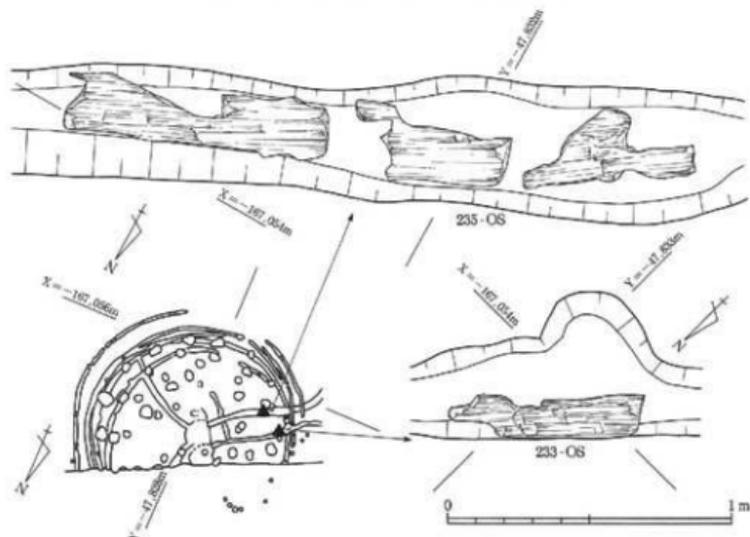
『Ⅲ期の住居跡』 (第23・24図、図版20・21)

Ⅲ期の住居跡は建物全体がⅠ・Ⅱ期の建物のやや北西側に重複するような形状で検出された。調査区内では外側の柱が8本、内側の柱は2本検出された。この建物は外側に14本、内側に4本の柱によって構成される建物と考えられ、建物を復元すると直径約10m、床面積は約78㎡を測るものになるものと思われる。

柱穴跡は直径60cm前後の掘方で深さ50cm前後を測り、埋土は灰色系と黄灰色系の粘土で埋まっていた。柱根の残っているものが多く、Ⅱ期のように柱の根石の代わりとしていた木片が検出されたものもある。

炉は北側を切られているため本来の形状は不明であるが、不整な円形を呈し、最大直径1.2m、深さ65cm前後になると思われる。炉からは排水溝が西方向に大きく延びる。

なお、Ⅱ・Ⅲ期の炉の排水溝の上部で溝蓋と思われる板が(第24図参照)確認された。この溝蓋と思われる板は溝の肩に沿うように検出された部分もあった。板は最大厚で約1cmのもので、ほとんどが溝の内部に落ち込むようにして検出された。



第24図 1-O D内233・235-O S板状木片出土状況(2-C)

掘立柱建物跡はその1のC地区とその2のC地区で検出され、住居跡は東西方向と南北方向に主軸を分ける。土器の出土は少なかったが竪穴住居跡と同じ頃の物と推定される。

1・2-OB (第26図、図版22)

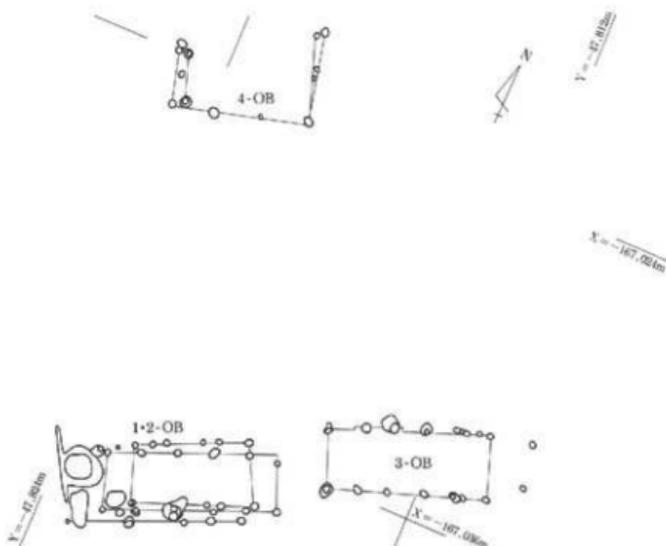
やや西よりの建てられた1-OBは1間×5間の掘立柱建物跡である。137・139・140・148・1252・1280・1283・1286・1288・1289・1296・1301-O Pで構成されている。

建物の規模は2.0×6.0mで、床面積は12㎡を測り、方向はN-22°-Wを示す。柱根間の距離は梁行き2m、桁行き1.2m前後である。柱穴は丸形で径は25cm前後である。

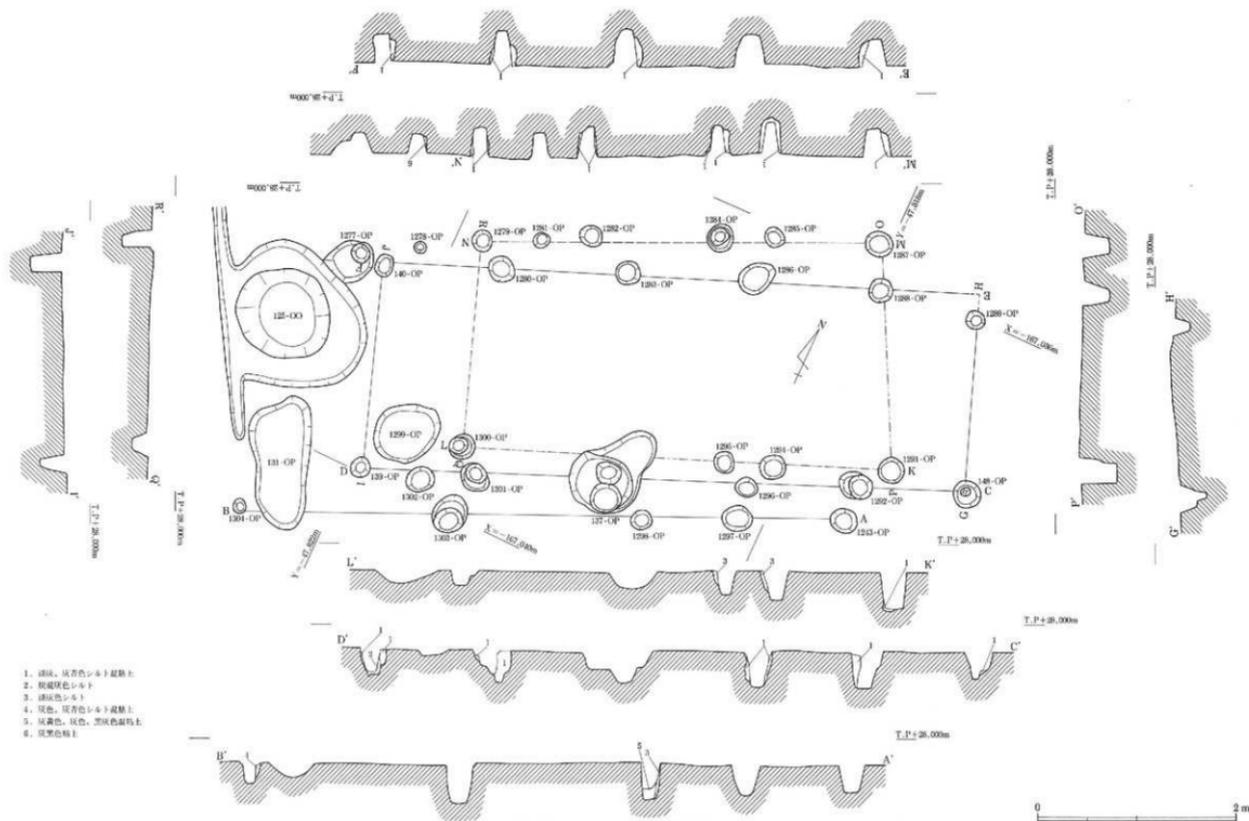
2-OBは1間×3間の小型の掘立柱建物跡である。137・1279・1282・1285・1287・1291・1294・1300-O Pで構成されるものと思われる。

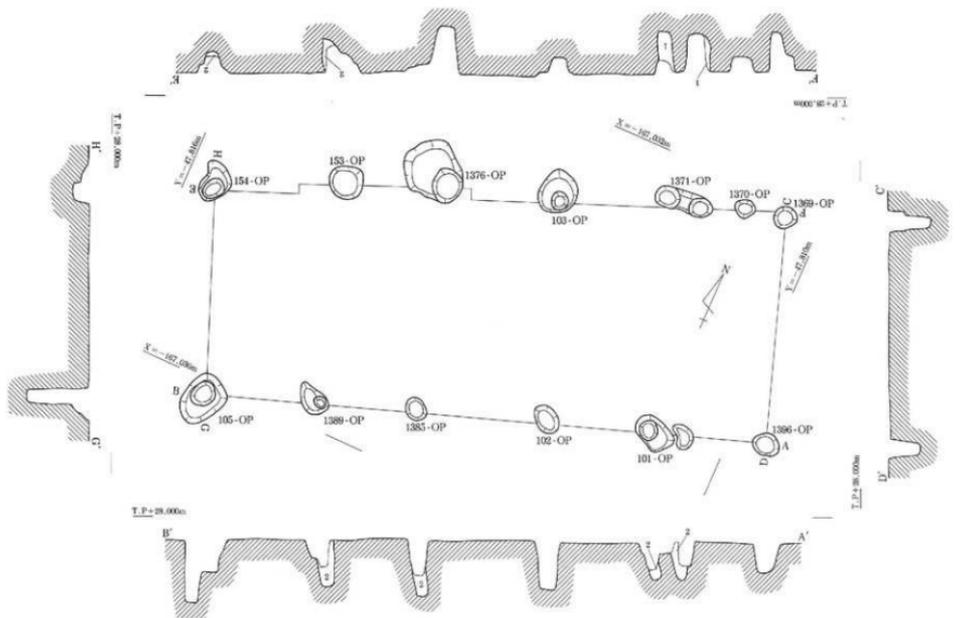
建物の規模は2.0×4.2mで、床面積は8.4㎡を測る。方向は1-OBと同じであるが前後関係は切り合いがなく不明である。柱根間の距離は梁行き2m、桁行き1.3m前後である。柱穴は丸形で径20cm前後である。

3-OB (第27・28図、図版23)



第25図 1～4-OB遺構配置概略図(1-C)





1. 灰色、硬若灰色或入粘土
2. 灰黄色、硬若灰黄色或入粘土



第27图 3-OB平·断面图(1-C)

1・2-OBの東側で検出された1間×5間の掘立柱建物跡である。101・102・103・105・152・153・1369・1371・1376・1385・1389・1396-OPで構成されている。

建物跡の規模は2.0×5.5mで、床面積は11㎡を測り、方向はN-21°-Wを示す。柱跡間の距離は梁行2m、桁行1.1m前後である。柱穴は隅丸方形と丸形で径は30cm前後である。

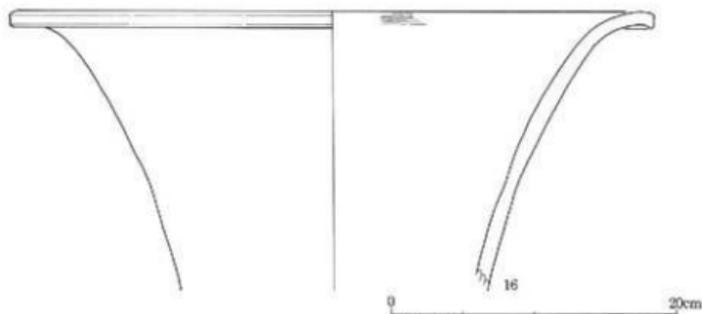
なお、153-OP内より非常に摩滅したものであるが広口壺形土器の口縁部と思われるものが1点出土した。口径45.6、残存高19.7cmを測るが、調整その他は不明である。

4-OB (第29図、図版23)

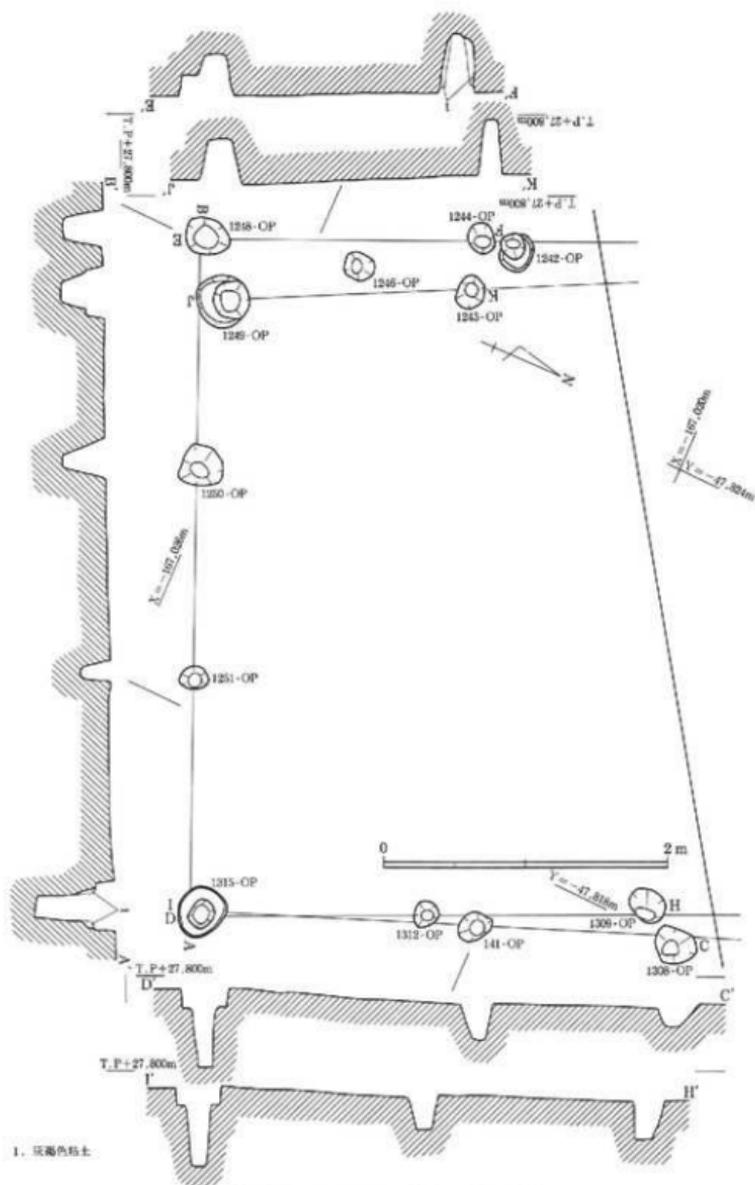
調査区の北側で検出され、北側を調査区外に延ばす。調査区内での検出では3間×2間以上の掘立柱建物跡であると思われる。1244・1248・1250・1251・1309・1312・1315-OPで構成され、建物跡の規模は4.2×3.2m以上のものであると思われる。方向はN-17°-Wを示し、柱穴間の距離は東西が1.4、南北が1.6m前後になるとと思われる。柱穴は丸形で径は30cm前後である。

5-OB (第30図、図版24)

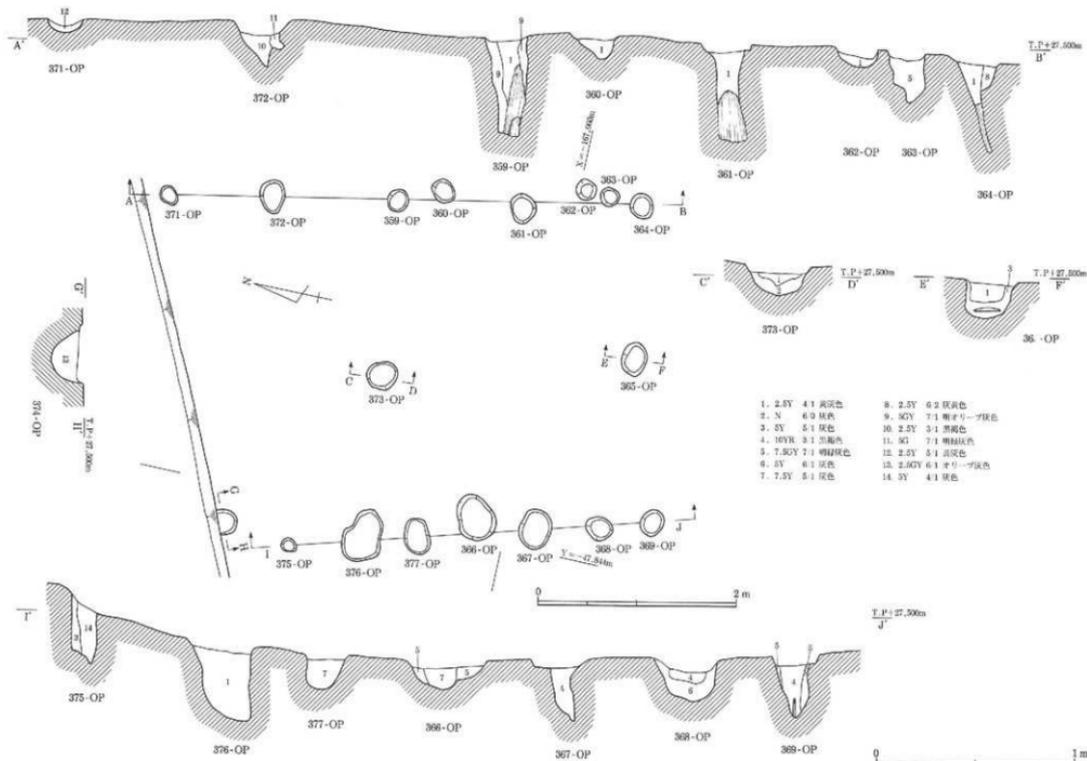
2-C区で検出された2間×4間以上の掘立柱建物跡である。361・364・365・367・369・371~375・377-OPで構成され、北側はその1の調査時の境目で不明であるが、2間×4間以上の掘立柱建物跡であると思われる。建物の規模は3.0×4.9m以上のもので、方向はN-16°-Wである。柱穴間の規模は梁行きが1.2m、桁行きが1.3m前後である。柱穴は丸形で径は30cm前後で、深さ80cmと深いものが多い。柱根が検出されたものもある。



第28図 3-OB内153-OP出土遺物(1-C)



第29圖 4-OB平・断面圖(1-C)



第30图 5-OB平·断面图(1-C)

113・139-O S (第31・32図、図版25～30)

その1のC地区及びその2のC地区北西端で大溝とそれに沿った小溝を検出した。

大溝113・139-O Sは、現在ある300m西側を流れる和田川の屈曲と平行して南北方向から西北西方向にくの字に折れながら、TP.27.2～26.75mへと溝底を北側へと下げていく。113・139-O Sは60m東にあるその6の谷も、くの字に屈曲し平行して存在する。この向きの北東側の微高地をたどると、少なくとも径150mエリアは集落として構成していたと考えられる。いずれにせよ、弥生時代中期の集落がその1・2、その6東側地点から北側に大きく広がっていることが予期される。

113-O Sの西縁の一部は、上層に位置する溝55-O Sに切られるが、幅は3～5mで深さ0.5～0.8mあり、断面形は上部が広がるU字形を呈する。堆積土は全体に暗灰色の粘質シルト系のもので、中程で黒色の有機物細層をはさむ。それより上層はオリーブ味が加わり、下層は青味が加わる。

溝内全体にわたって、自然木及び木製品、弥生土器、石器が出土するが、主に、中層に集中し、穀木の自然木などが横たわっている状況や、113-O Sの南東側、北東法面近くに足場を確保するように桝状木製品の組材が置かれる状況が見られた。

大溝の西側に平行して130・165・166-O Sの小溝がはしる。幅0.25～0.6m、深さ0.1mあり、断面形はゆるい皿状を呈する。堆積土は黄灰色を呈し、大溝の最下層付近の堆積層と類似することから、大溝の開削後しばらくしてこの小溝が穿たれた可能性がある。

113-O S 出土遺物 (第32～38図、図版49～52)

大溝113-O Sからは、コンテナ9箱分の出土遺物があり、調査区南側にある試掘では土器がコンテナ17箱、木製品が3箱出土した。

木製品 (第32図、図版29)

加工木の出土は比較的量が多く、桝状木製品などが出土する。試掘でも、脚付きで、2方向に把手が削り出される円形容器の蓋になるであろうもの、柄孔の貫通しない広楕円や大まかに形を整っている狭楕の未製品があるのが特筆できる。

桝状木製品は、桝形田下駄とも考えられるが足板に相当するものがなく判然としない。また、建築部材であるとするれば、壁の一部を構成、もしくは窓あるいは扉状の装置になるのかもしれない。長さ45cm前後の細木を結合させていたものと考えられ、全体で長さ50.0、

幅45.0cmの大きさになる。枠材は一辺1.5cmのミカン割材を利用し、面取りし、厚さ1cm前後に仕上げる。平行してある2本の縦枠に相当する部分の間を埋めるように直交させ平行に組み、それらの両端をやや細くした13本の横枠が下に並ぶ。さらに、その横枠列の中央を渡すように細木が下に重なった状況で出土したが、調査ではこれらを繋ぎとめる加工痕を認めることができなかつたとともに、紐痕等も検出し得なかつた。

弥生土器（第33～37図、図版49～52）

土器は摩滅が少なく、水に流されたような痕跡はあまりない。全体に第33～35図のように変形土器の出土が目立ち、他に壺・高杯・蓋形土器がある。

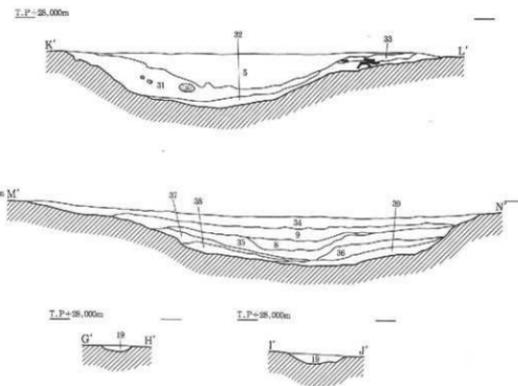
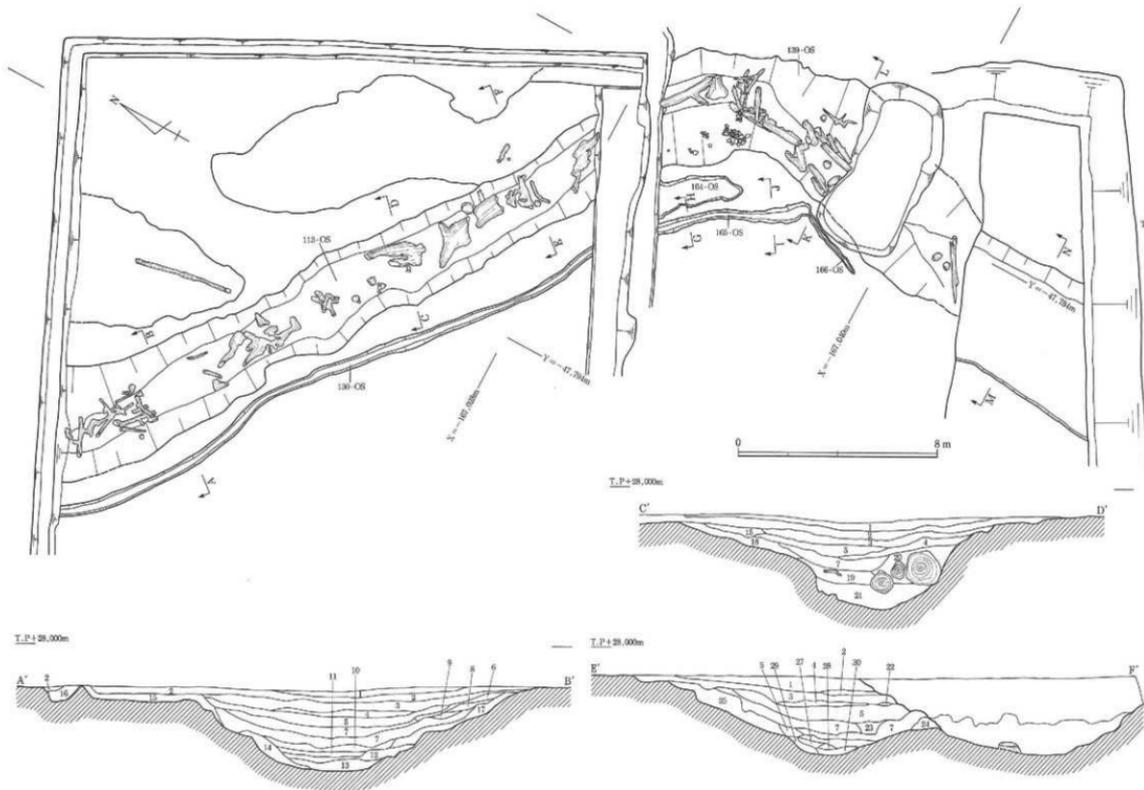
変形土器は第33～35図に図示した。口径は14～39cmのものまで含み、大小バラエティーに富む。器高が分かるものは、小さい41が27.4cm、大きい42が44.55cmである。器形は体部最大径が上部にあり、肩のはるものが多い。口縁部はくの字に折れ、やや外湾しながら比較的大きく広がる。その端部は面をもち、上にわずかにつまみ拡張するものがある。また、35のように刻み目をもつものもある。

外面調整はハケメが主体的であるが、30や41のようにヘラミガキを全体に施すものや25のようにヘラケズリを施すものもある。部分的には、ヘラケズリの後にハケメを施すことが観察できる21・32・38・42や、さらにハケメの後に体部中央を中心にヘラミガキを施す43がある。内面調整もまたハケメが目立つが、他にナデも多い。一部、19・26にはヘラミガキも認められる。

一方これらの他に、17は外面肩部に櫛播波状文があり、内面はヘラミガキを施し、胎土も緻密であることから、鉢形土器になる可能性が高い。色調は灰白、浅黄の系統がほとんどである。胎土は17を除いて、やや粗い。

第36図にある変形土器は全体に頸部のしまらない、なで肩のものがほとんどであるが、48のように頸部と体部の境が明瞭なものもある。頸部は外方にゆるく開く44・48・51・53が主体であるが、上方にすばまり気味の49・50・52もある。前者には、口縁部付近で大きく水平方向に広がる44・47と下方に向かって折れ曲がる53、そのまますなりと広がる45・48、やや内湾気味の45・51がある。口径は大きい53が55.2cm、小さい51が5.8cmである。後者は、短く外に開く口縁部をもち、径は12.4と7.4cmである。

45・48・52をのぞいて外面に櫛播文が付き、直線文を基調としている。44は口縁端部に波状文、頸部から体部にかけて7連・10ないし11条の直線文があり、最も上部は上から見て逆時計まわりに施す。46は口縁部付近から体部にかけて9連・12ないし13条の直線文で、



- | | | |
|----------------------|---------------------|----------------------|
| 1. 5Y 6:1 灰色 | 14. 5BG 7:1 相存灰色 | 27. 2.5Y 3:2 紫褐色 |
| 2. 5Y 4:2 灰オリーブ色 | 15. 5Y 6:3 オリーブ褐色 | 28. 2.5GY 6:1 オリーブ灰色 |
| 3. 10Y 3:2 オリーブ灰色 | 16. 10GY 5:1 緑灰色 | 29. 2.5GY 5:1 オリーブ灰色 |
| 4. 2.5Y 2:1 灰色 | 17. 10YR 4:2 土赤・黄褐色 | 30. 7.5Y 5:1 灰色 |
| 5. 5Y 4:1 灰色 | 18. 7.5YR 2:1 褐色 | 31. N 1.5:0 白色 |
| 6. 2.5Y 6:3 土赤・灰色 | 19. 2.5Y 4:1 黄灰色 | 32. 10Y 3:1 オリーブ灰色 |
| 7. 7.5Y 4:1 灰色 | 20. 2.5Y 3:1 紫褐色 | 33. 5Y 2:1 灰色 |
| 8. 10Y 4:1 灰色 | 21. 7.5YR 5:1 土赤・褐色 | 34. 5GY 5:1 オリーブ灰色 |
| 9. 2.5GY 4:1 暗オリーブ灰色 | 22. 7.5YR 4:3 褐色 | 35. 7.5Y 5:2 灰オリーブ色 |
| 10. 2.5Y 6:1 黄灰色 | 23. 5YR 5:2 灰褐色 | 36. 5Y 5:1 灰色 |
| 11. 10G 5:1 緑色 | 24. 10GY 6:1 緑灰色 | 37. 2.5Y 5:1 黄灰色 |
| 12. 5GY 6:1 オリーブ灰色 | 25. 2.5Y 4:2 相存灰色 | 38. 10YR 6:1 褐色 |
| 13. 5B 6:1 黄灰色 | 26. 5Y 3:2 オリーブ灰色 | 39. 7.5GY 5:1 緑灰色 |

0 2m

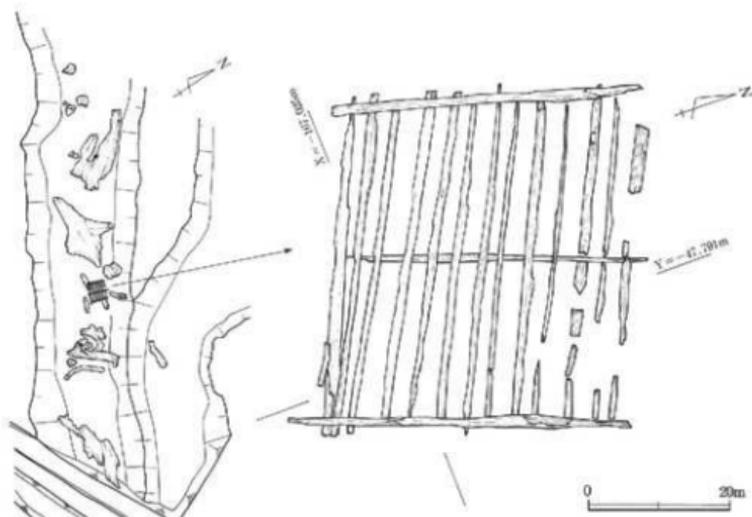
第31図 113・130-OS、139・164~166-OS平・断面図(1-C、2-C)

時計回りに施す。47は頸部に少なくとも3連・11条の直線文がつき、口縁部下端には刻み目がつく。49は頸部に5連・8条のやや粗い直線文で、上から2連目に擬似流水文が見られる。50も粗く6条のものが2連ある。51は体部と頸部の境に少なくとも8条の直線文が1連つき、口縁部付近に比較的細かいピッチで8条の波状文がつく。53は頸部に4連・6～8条の直線文がある。

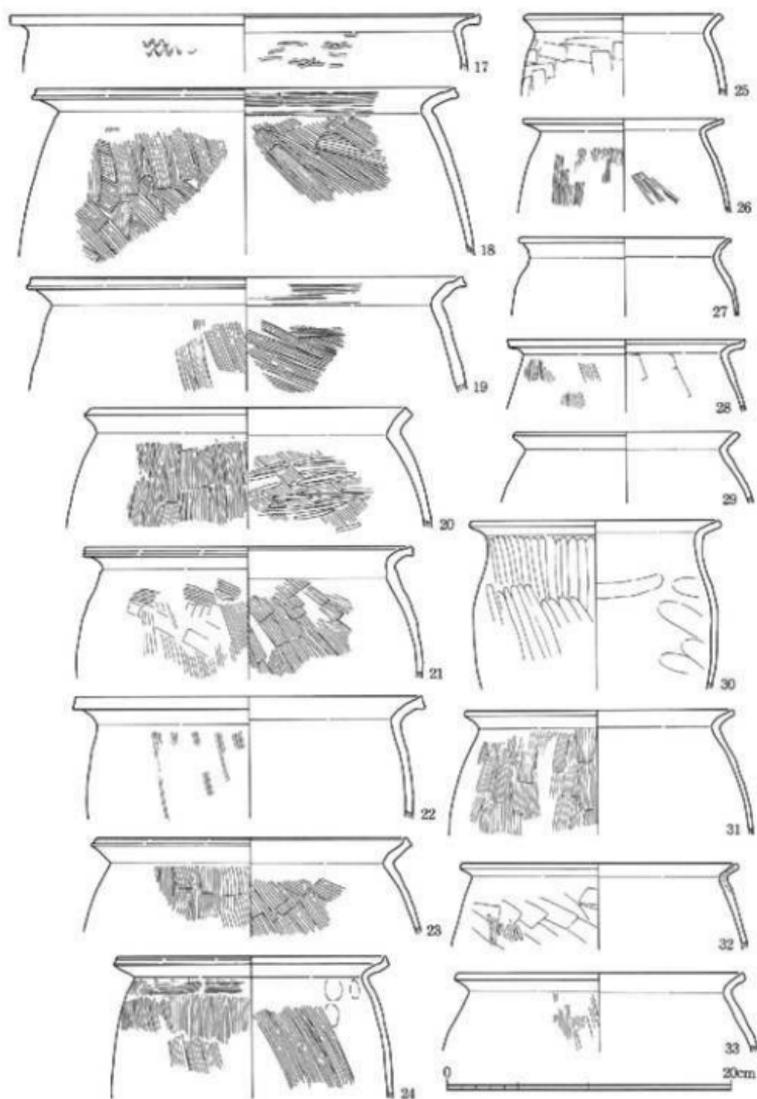
こうした櫛描文以外に、45の口縁部には2条の凹線文がつき、48の口縁部付近には竹管文が2個横に並ぶ。

壺形土器の外面調整は、44・45下半・47・51がハケメ、48・49下半がヘラミガキ、45頸部・46・49上半・50・52・53がナデである。内面は、44・45上半・46下半・48・50～53がナデ、45体部下半・47がハケメである他、46の頸部と体部の境目を、51は頸部を、52は底部を中心にシボリ目がつく。48には工具の当たりがつく。色調は黄灰、浅黄色を基調とし、胎土は46・48・49・51が緻密であるが、他は粗めである。

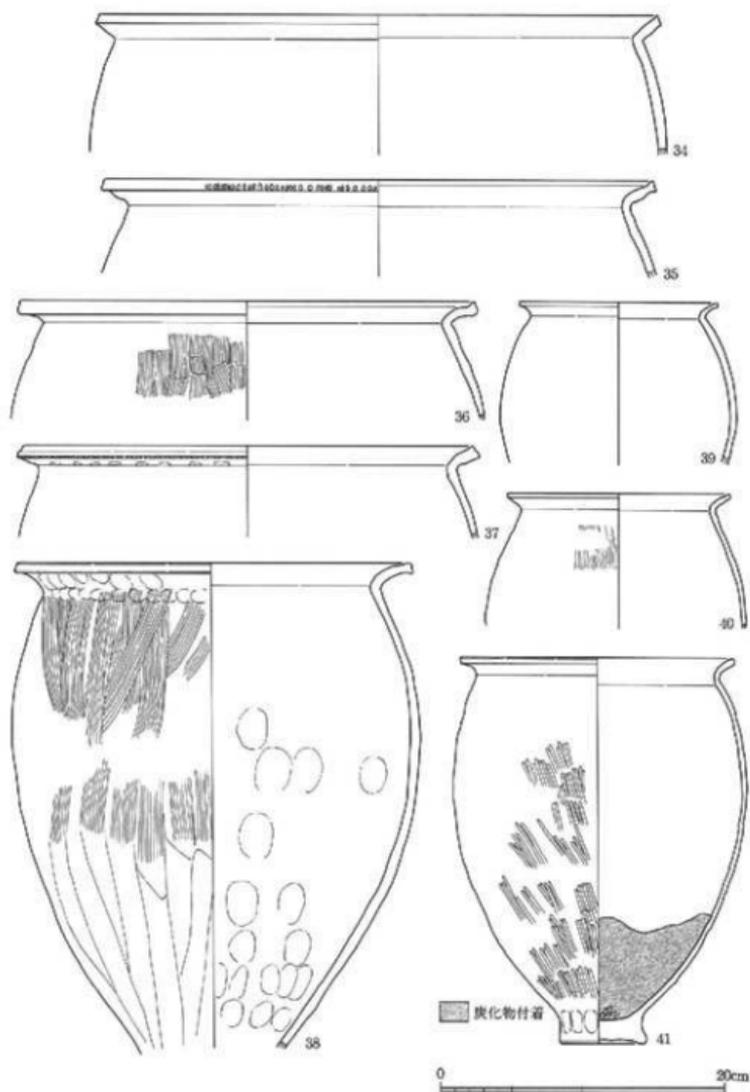
第37岡高杯形土器には、半球状で碗形の杯部をもつものが多い。また、口縁部と体部に明瞭な屈曲をもつ55もあり、凹線文3条がこれに認められる。口縁端部は内外にわずかに



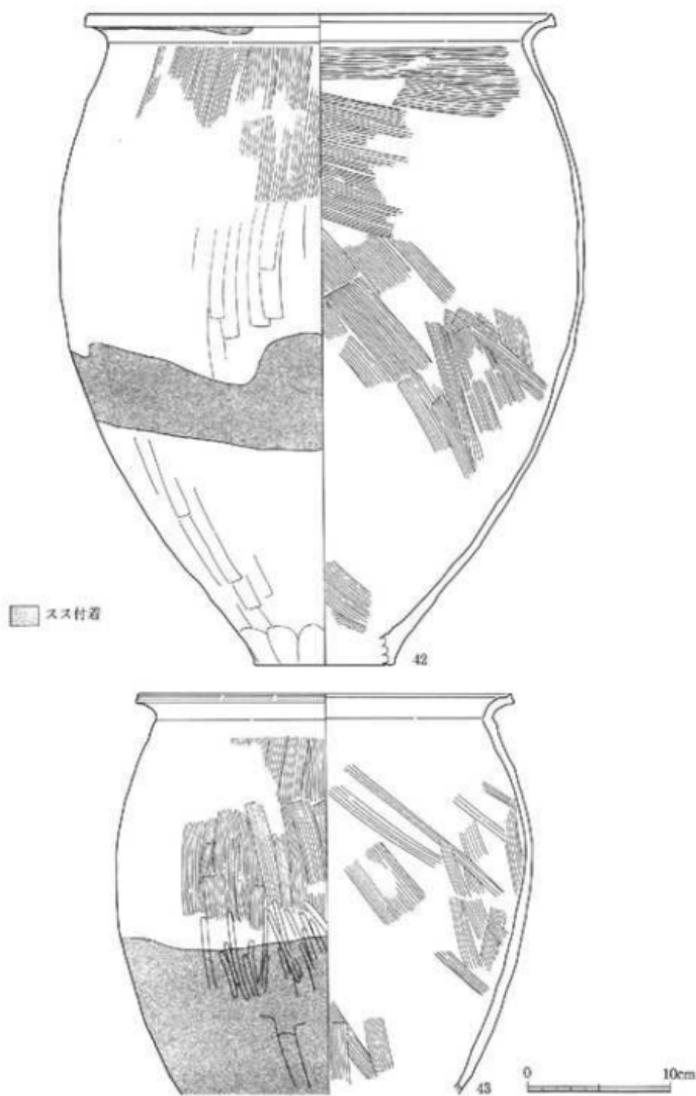
第32図 113-O S木製品出土状況(1-C)



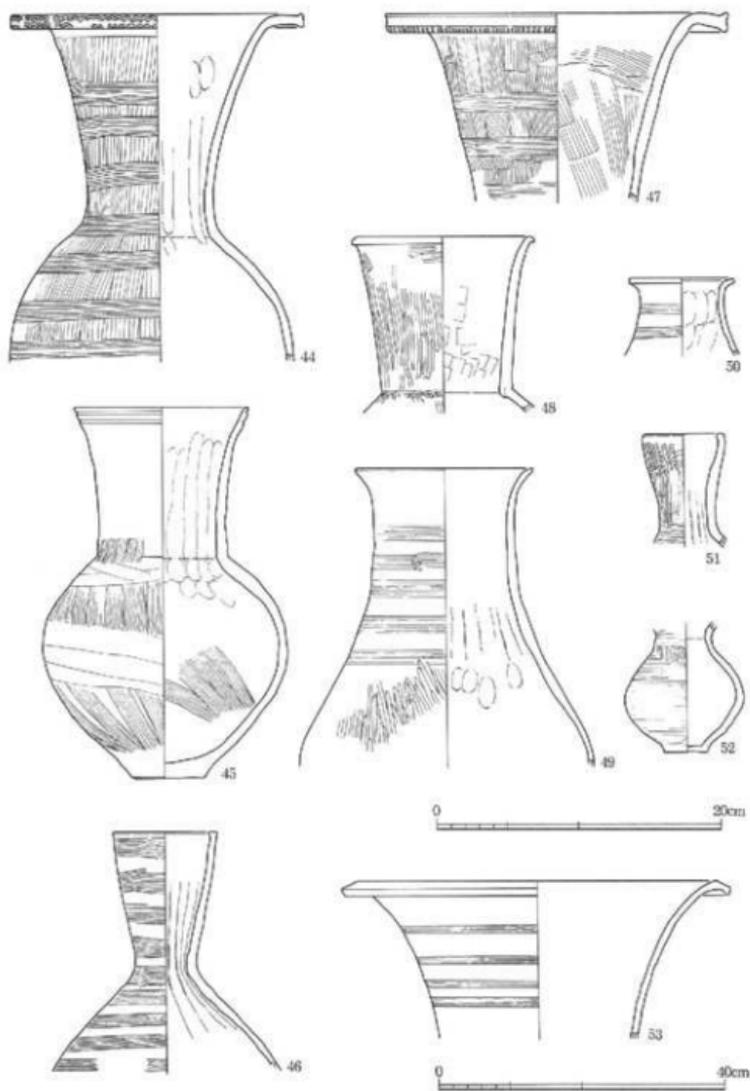
第33图 113-O S出土遺物(1) (1-C)



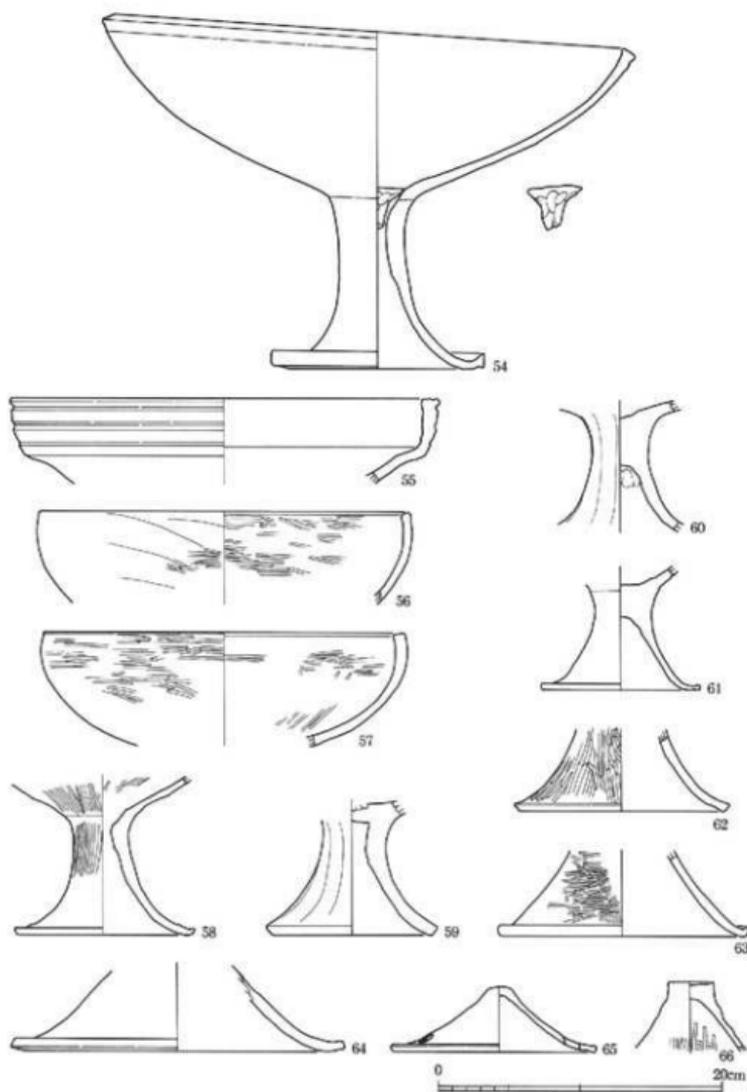
第34図 113-OS出土遺物(2) (1-C)



第35図 113-O S出土遺物(3) (1-C)



第36图 113-O S出土遺物(4) (1-C)



第37图 113-OS出土遺物(5) (1-C)

拡張肥厚させて面をもつものが多い。杯底部の成形では54・58・59のように円板充填法によるものがある。脚部は中空が主で、60のみ中実気味である。54・58・63の脚は比較的短く開き、端部を上方につまむ。

外面調整は54・61がナデ、56・62がヘラミガキ、58・63がハケメ後ヘラミガキ、58～60がヘラケズリである。内面はナデが54・59・61杯部・62・63、ヘラミガキが56・57、ハケメが58である。59にはシボリ目がある。色調は灰黄・灰白・灰褐色が多い。

第37図下にある64～66は蓋形土器になると考えられる。口径は64が23.4、65が14.5cm、頂部は65が丸みを帯び、66は平坦で中央がへこむ。調整は全体にナデで、66の下半には内外面ともにヘラミガキを施す。これのみ黒褐色で、他は灰黄褐色である。胎土はいずれも粗い。

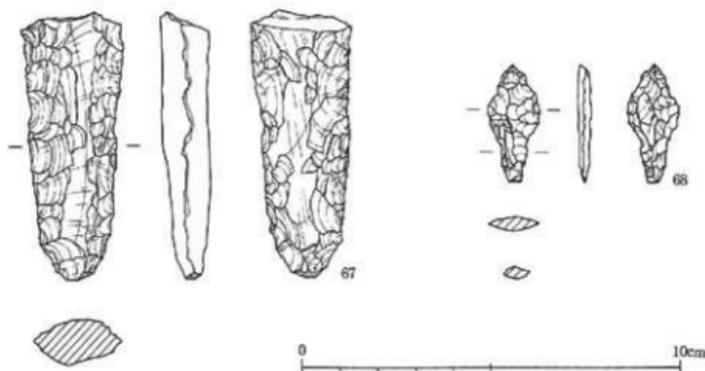
以上、見てきた土器の特徴から、その時期は、畿内第Ⅲ様式前半を中心として、その前後を含んでいる。溝の開削から最終埋没は弥生時代中期全般で見ておいた方がよいだろう。

石器（第38図、図版65）

石器には石槍、石鏃があり、双方とも打製のサヌカイト製である。

石槍は基部側半分程が残る。現存長7.02、幅2.67、厚さ1.25cmの大きさで、重さは28.8gある。基部に原面を残し、側縁中央に摩擦痕状のものが認められる。

石鏃は長さ3.1、幅1.37、厚さ0.36cmの大きさで、重さは2.5gある有茎式のものである。棒形木製品の下から出土した。



第38図 113-O S出土石器（1-C）

139-OS出土遺物 (第39図、図版53・54)

出土遺物には、甕・壺・鉢形土器がある。

甕形土器の75・76は口径17.6・21.0cmの中形品、80・81は口径27.6・29.3cmの大形品である。いずれもなで肩で、くの字に屈曲する口縁部であるが、75は直線的に外反し、他は外湾気味である。端部はそれぞれ面をもち、大形のは上端を外上方へつまみ気味であり、80上端には刻み目がつく。75内外面・76・80外面には煤が付着する。

77の壺形土器は、下膨れの体部に上半に櫛描文が施される。上には8条の直線文が3連あり、下端に8条の波状文がある。底部径は5.4cmで、体部径21.9cmに比して小さい。

鉢形土器の78は口径12.4、底径5.4cm、器高7.8cmの小形品、82は口径26.4cmの大形品である。79は甕形土器底部か鉢形土器か判然としないが、78のものとともに直線的に外反する体部となる。79の口縁部はこころもち立ち上がり気味で、端部は丸みをもつ。79の底面は上げ底気味である。82は丸みのある体部にくの字に屈曲する口縁部をもつ。端部は上下へやや肥厚気味で下端に刻み目がつく。

調整は75・76・81・82内外面・77外面下半と内面体部屈曲部・80内面にハケメ、75内面・79内外面にナデ、79底部付近にタタキメ状のものが施される。色調は灰黄褐色を基調とする。胎土は77がやや粗いが、他は緻密である。

以上の特徴から、畿内第Ⅲ様式に属すると考える。

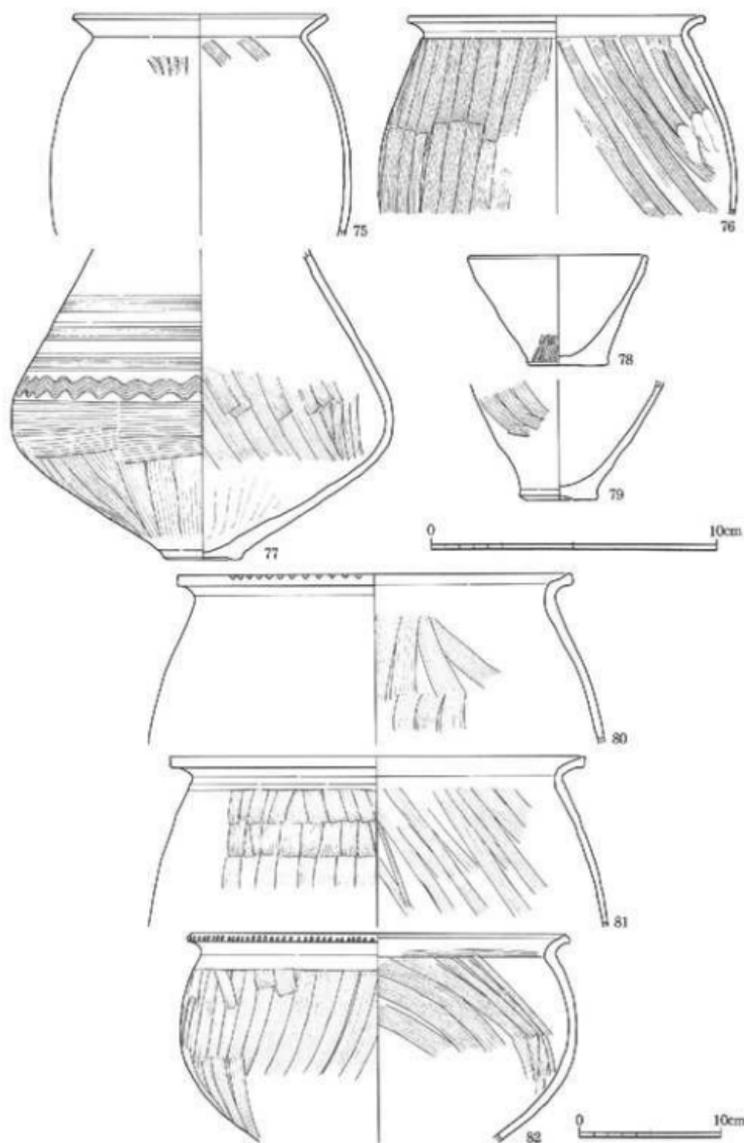
130-OS出土遺物 (第40図、図版53)

出土した土器には甕・壺・鉢形土器と壺形ないしは有蓋無頸壺形土器の台部と考えられるものがある。

甕形土器の69は口径14.4cm、なで肩の体部からくの字に屈曲する口縁部がつき、端部を上方にわずかに拡張する。外面には煤が付着する。

壺形土器には70~72、74がある。71の口縁部は径が12.6cmあり、ゆるくラップ状に広がる頸部から大きく外湾して広がる。これも端部は上方に拡張するとともに、下端に刻み目をつける。底部は比較的薄く、径は70が6.5、74が8.3cmと大きめで、体部にむかって大きく直線的に広がる。70は体部下半で、算盤玉様に膨れる。74の台は底径9.0cmに対して比較的高さのある中実のものである。端面はやや上方拡張気味で面をもつ。

鉢形土器の73は手づくね風の口径9.4、底径5.1、器高9.0cmの大ききで、口縁端部は丸く



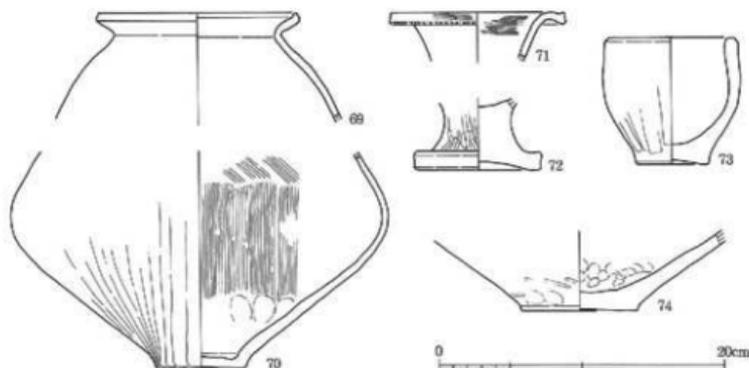
第39圖 139-O S出土遺物(2-C)

おさめ、底部は上げ底気味である。

調整は、69・73内外面にナデ、70内面にハケメ、71内外面・72・74外面にヘラミガキ、73外面下半・74底面にヘラケズリを施す。

色調は全体に灰黄色を基調とし、73のみ灰オリーブである。胎土は全体に緻密で、70と74がやや粗い。

底部の形状などから畿内第Ⅲ様式前後と見てよいであろう。

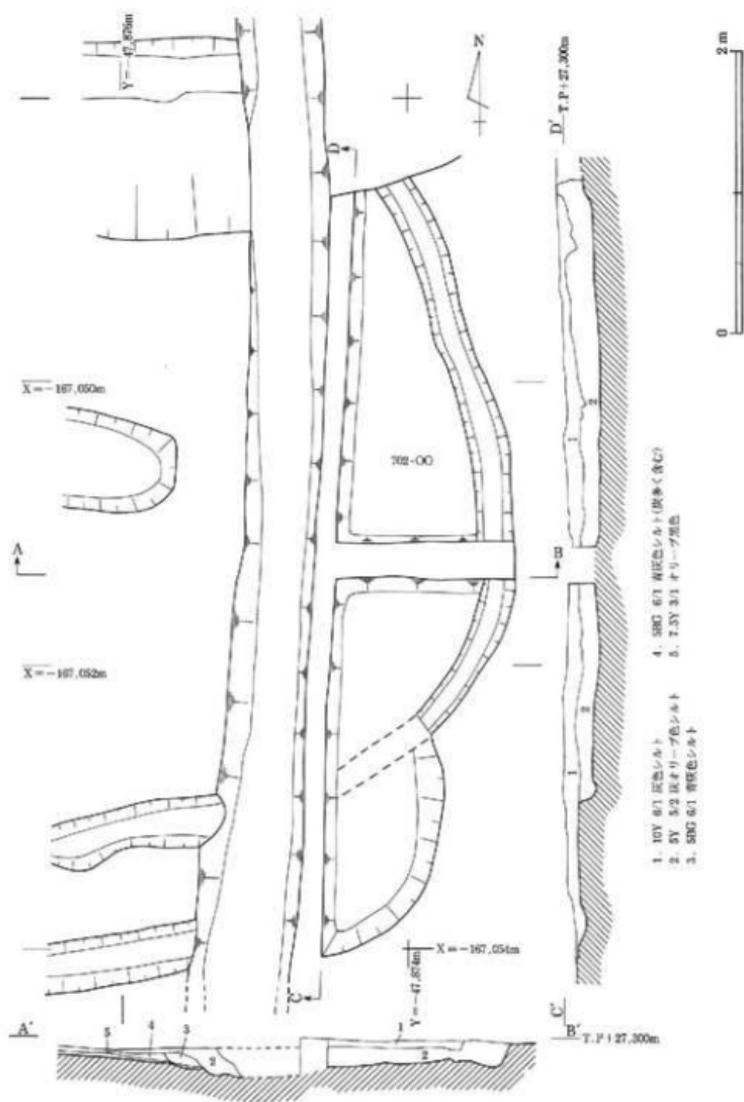


第40図 130-O S出土遺物(1-C)

702-O O (第41図、図版31)

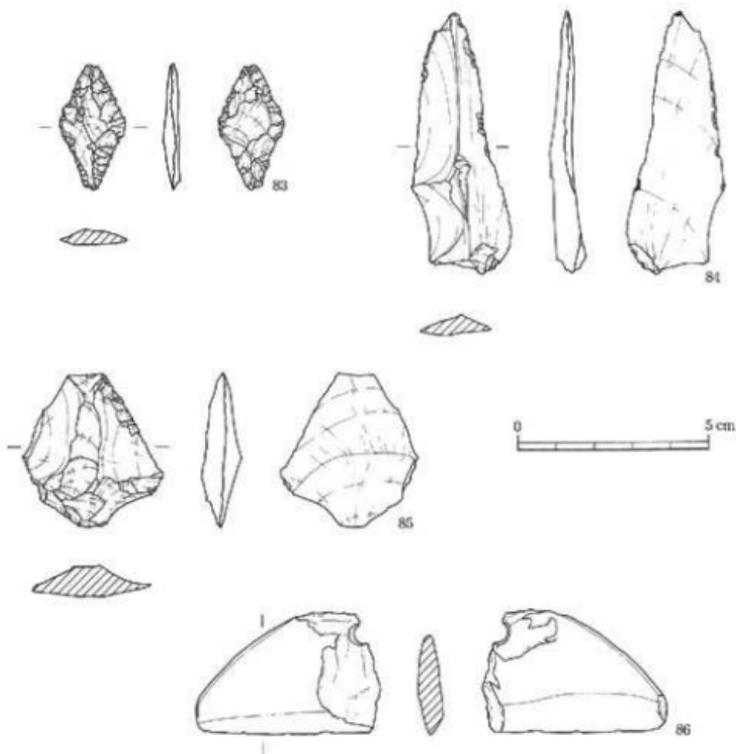
その1のB地区の北東端で、竪穴住居状の土坑702-O Oを検出する。北側は落ち込みに切れ、西側は調査区外になるため、その全容はわからない。しかし、その半分近くが検出されたものとする。

一辺5.5mの不整隅丸方形に掘りくぼめられたものである。15°前後に西へふれ、もともとの地形が高いと考えられる東半分ほど深くなっている。現状で最も深いところは0.3mある。南側には0.4mほどおそらく方形になるであろう張り出しが付き、一段浅くなっている。双方の周縁には0.1~0.2mの細い溝がまわる。埋土は上層が張り出し部も含めて灰色シルトが覆い、下層は灰オリーブシルトが主体的であるが、西側中央付近はさらに下に炭化物層が堆積する。この層より石器が出土し、未製品も混じることから石器製作に関係する遺構かもしれない。



第41図 702-00平・断面図(1-B)

サヌカイト製の石器があり、83・84は炭化物層から出土する。83は有茎式の石鏃で、長さ3.26、幅1.72、厚さ0.41cm、重さ1.9gをはかる。84は長さ6.89、幅2.5、厚さ0.55cm、重さ8.25gの縦長剥片である。85は現存長4.05、幅3.65、厚さ1.06cm、重さ11.04gのもので、全体に菱形を呈し、下端が欠ける。この個所が刃部となる石鏃木製品の可能性がある。86は半月形を呈する片刃の石包丁である。背の方にある孔で縦に割れる。孔径は4.6mmで両側穿孔である。現存長・幅は3.2・4.8、厚さ0.65cm、14.94gをはかる。



第42図 702-〇〇出土石器(1-B)

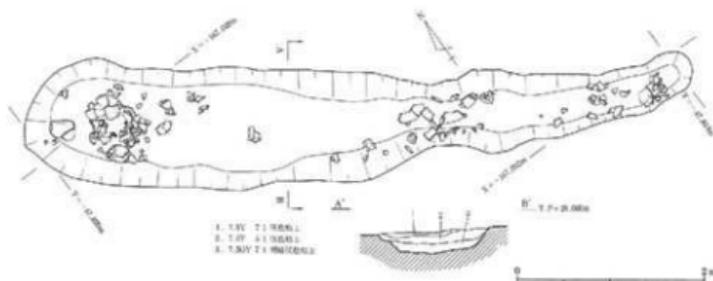
その1のC地区中央やや西よりに位置する溝状の落ち込みである。北西側の長さ4.2、幅0.4~1.3の長円形土坑に幅0.4~0.5mの溝が取り付くような形状である。断面は逆台形を呈し、深さは0.2mある。埋土は、上層が灰色粘土、下層が明緑灰色粘土であり、長円形の両木口と溝南東部端で弥生土器が出土し、壺形土器が目立った状態ではあるが、原位置をとどめそうなものはない。

118-O S 出土遺物 (第44・45図、図版54・55)

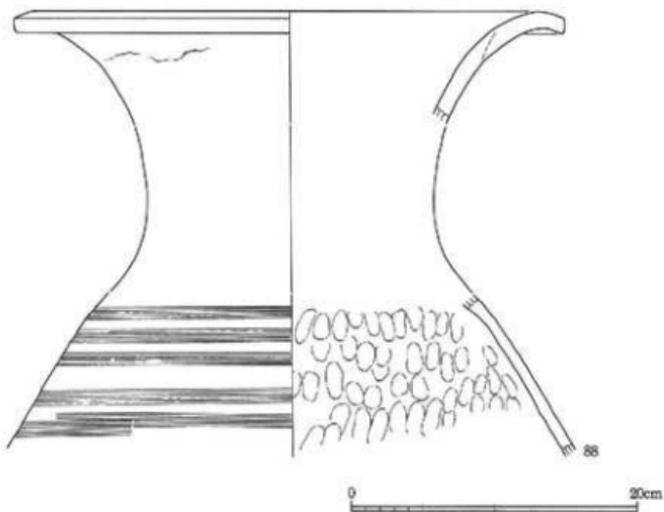
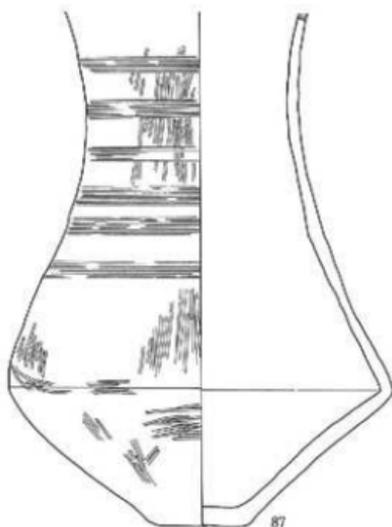
出土した弥生土器は壺形土器の他に、甕形及び高杯形土器の脚部ないし壺形・鉢形土器の台部になるものがある。

壺形土器は体部径27.0、残存高36.8cmの87、口径39cmの88という大形品と口径19.9・17.7cmの89・90の中形品、口径11.4cmの小形品及び、細頸壺がある。大形品は櫛描文のつく装飾性のあるもので、体部が下膨れの算盤玉様の体部に肩部の不明瞭なあまりしまらない頸部のものである。88の口縁は大きく広がり端部付近でやや下方に屈曲し、端部は面をなす。

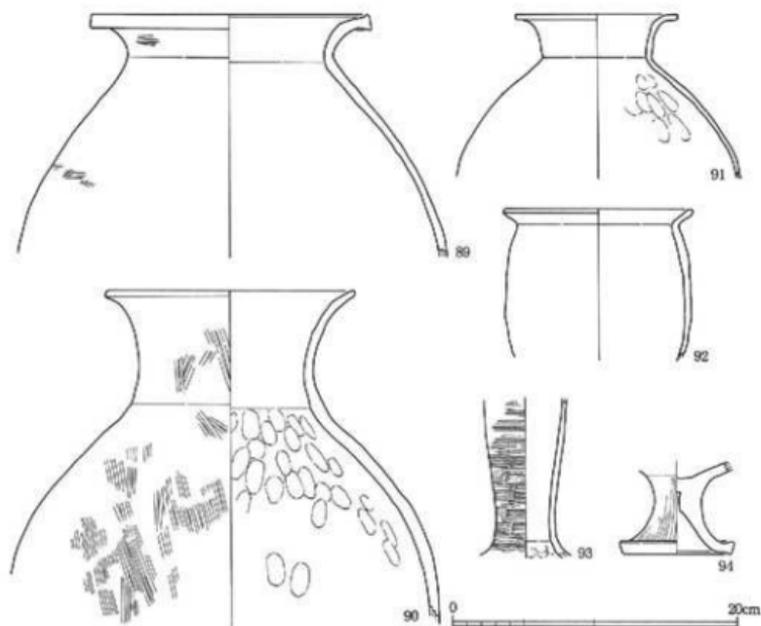
中・小形品は大形品と細頸壺には櫛描直線文がある。87は肩部から頸部にかけて6連ある。文様は鮮明でないが、おおむね9条のものを施したと思われる。88は肩部に11条が5連あり、最も下は上からみて逆時計回りに施す。93は頸部径4.2cmの細い頸に8条が10連



第43図 118-O S 平・断面図 (1-C)



第44圖 118-OS出土遺物(1)(1-C)



第45図 118-O S出土遺物(2) (1-C)

あり、上から2連目は上からみて時計回り、5連目は反時計回り、6～10連目は時計回りに施す。

調整は外面が87・89・91・93にヘラミガキ、内面はナデが多い。

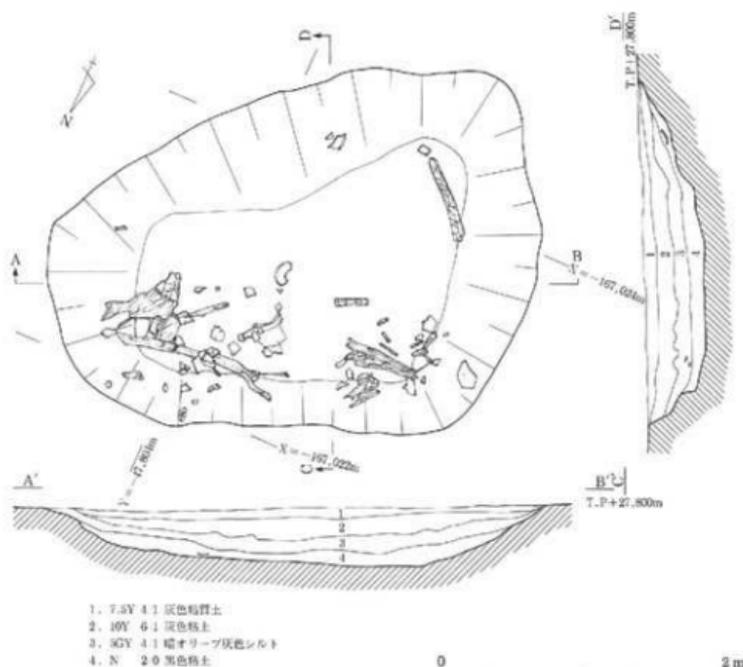
92の壺形土器は肩の張らない寸胴気味の体部にくの字に屈曲する口径13.0cmの口縁部をもち、端部は丸くおさめる。

94の高杯脚部は短い比較的にしまった脚柱部をもち、裾部で大きく開く。裾端部は上下にわずかに肥厚する。外面調整はヘラミガキである。

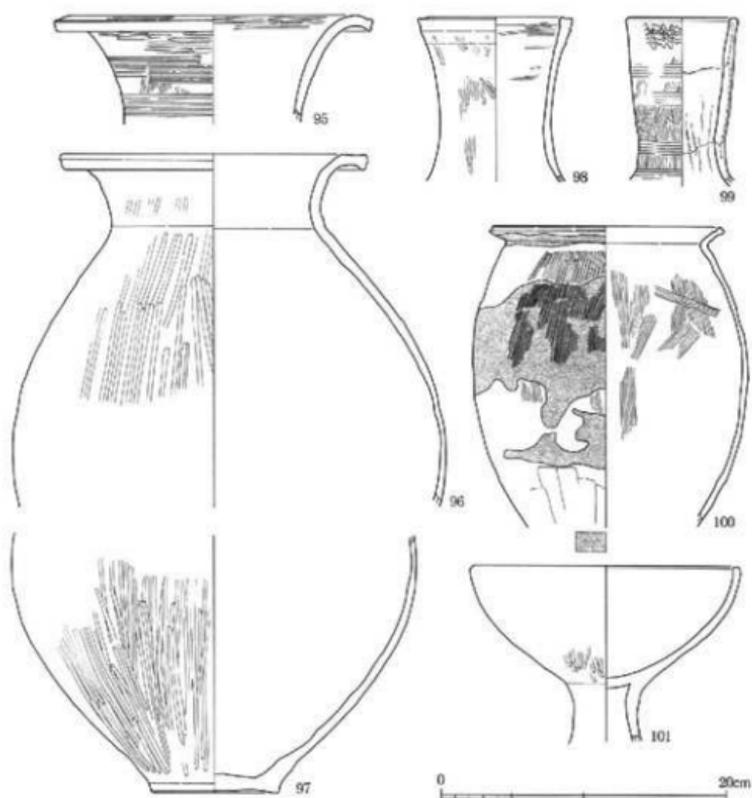
全体の色調は灰黄、灰白、黄褐色を基調とする。大形壺形土器以外の胎土は緻密である。

以上の特徴から、畿内第Ⅲ様式でも古いところに属すると考える。

その1のC地区の中央やや東より、大溝113-O S他の西2mで検出する。長さ3.2m、幅1.8mの長方形土坑の南西隅がこぶ状に拡張されたような形状を呈する。断面皿形で深さは0.4mである。底面は拡張した西側が深く東に向かって徐々に上がる。堆積は全体に安定しており、オープンな環境で徐々に上砂が埋まっていったようである。上層が灰色粘質シルト及び粘土であり、下層は暗オリーブ灰色シルト、黒色粘土が堆積し、遺物は土坑底面周囲の下層から土器と木材が多く出土する。このことから、大溝113-O S他との関連性が考えられる。



第46図 122-00平・断面図(1-C)



第47図 122-〇〇出土遺物(1-C)

122-〇〇出土遺物(第47図、図版55)

出土した遺物には、壺・甕・高杯形土器がある。

壺形土器には、口縁が水平方向に大きく広がる95・96と頸部から細く直口気味に立ちあがるものがある。端部はいずれも両端にわずかに肥厚する。97は底径が8.6cmと大きく、やや上げ底気味になっている。櫛描文は95と99に見られ、前者は直線文が11条2連で、上の方は上からみて時計回りに施す。後者は5条5連で、最も上は波状文、それより下は直線文である。外面調整は95～98にヘラミガキ、99にハケメを、内面は95・97～99にヘラミガキ、96にナデを施す。

甕形土器はくの字に屈曲する口縁部で、端面はわずかに上下に肥厚する。体部はなで肩の寸胴気味のもので、外面には上半部にタテハケメ、下半部にヘラケズリが残る。高杯形土器は半球状碗形の杯部で、口縁端部は面をもつが両端に丸みがつく。脚柱部は中央がすぼまる中空のものである。調整は板ナデで、外面下にヘラミガキが残る。色調は黄灰褐色を基本とし、95・98の胎土は粗く、他は緻密である。

以上の特徴から、畿内第Ⅲ様式でも古いところと考える。

132-00 (第48図、図版33~34)

その1のC地区の中央やや南西よりでは、広縁未製品を一時的に保管したと考える土坑を検出した。ここでは、一次的な板材をはじめ、大まかに輪郭をつけた未製品が重なって出土している。保管土坑132-00は上部が大きく広がり断面皿形を、下部は比較的まっすぐに掘り込み、底を平らにした断面コの字形を呈する2段になったものである。

上段は一辺1.5mをややこえる正三角の平面形で、縁がかかる灰色を呈する土で埋まった深さ0.3mのものである。下段は三角形の側面片側によるようにして、長径1.2mほどのやや楕円形気味の円形を呈する。下3分の1に厚さ0.2mの黒色土が堆積し、その土中上部から未製品などが重なり合いながら出土する。それらの配置に整然とした規則性や集中は認めにくい。上には灰色土が0.4mの厚みでかぶるが、その四周の土が上段法面にそって薄くは上がり検出面まで及ぶことから上段と下段は一体の遺構と考えられる。南西にあるテラス状になったところを通じて木材を出し入れした可能性がある。総じて検出した土坑の深さは0.75mである。

この土坑より出土したものと似たような未製品は、東側にあるその6・谷6~7層でも関係木製品が出土することからも、先に113-OS他で想定した集落の周辺で木製品の製作にたずさわっていた状況がみてとれる。

132-00出土遺物 (第49~52図、図版67・68)

弥生土器 (第49図)

土器は7点を図化した。107の甕形土器を除き、壺形土器であるが、比較的球形を呈する体部の108の内面全体には煤が付着する。

壺形土器はいずれも口縁部がラッパ状に大きく開くもので、口径は17.4(102)~48.0